

「蠅の娘 紹介文」

岡和田晃

第2期『エクリプス・フェイズ』シェアードワールド小説企画の第4弾は、齋藤路恵を中心とした執筆チーム（齋藤路恵、蔵原大、仲知喜）が仕上げた「蠅の娘」である。

『エクリプス・フェイズ』はトランスヒューマン、平たく言えば遺伝子改造を施され、サイボーグ化した人間にスポットを当てたロールプレイングゲームであるが、必ずしも世界はトランスヒューマンのみの独壇場というわけではない。広大な『エクリプス・フェイズ』宇宙には、トランスヒューマンを「フランケンシュタイン」だと否定する、バイオ保守主義という勢力も存在するのだ。

今回ご紹介する「蠅の娘」は、バイオ保守主義の総本山である木星共和国の属国、衛星カリストの「ゲルズ」（北欧神話に由来する名を持つ都市国家）にて、秘密裏の諜報活動に従事する非トランスヒューマンの女性を語り手に据えた小説だ。

ともかくにも、“大破壊”後の世界をフラットとして生きることとは大変だ。「基本バイオ調整」をはじめ、あらゆるインプラントを拒否するがゆえに、風邪はひく、乗り物酔いはする、メッシュ通信のためには外部機器が必要だ……。そして、きわめつけは、魂

のバックアップをとっていないので死んでも復活ができないこと。バイオ保守主義を貫くのも楽ではないのだ。

本作は、このような「トランスヒューマンの時代に、生身で生きること」を、鮮烈で、読み手に戦闘時の“痛み”の感覚をヴィヴィッドに伝播させるような独特の身体描写を駆使している。

相互監視がルーティン化した官僚機構の内部で抑圧される語り手の閉塞感、そして閉塞感を伝える内面描写にも織り込まれる透明感は、時にはアンナ・カヴァンの傑作『氷』を彷彿させる部分もあり、眉村卓の言うインサイダーSF（SFの技法を用いて権力機構や大組織のシステムの特異性を抉り出すような文学形式）としても味読に堪える仕上がりになっている。

語り手を取り巻く、謎。はたして、なぜ、彼女は襲撃されたのか？

サイバーパンクSFノワールの伝統へ、ささやかながら新たな一ページを刻み込もうとするのみならず、フィリップ・K・ディックの『暗闇のスキヤナー』（『スキヤナー・ダークリー』）にも通じるアイデンティティの不安は、わたしたちが直面している現実の似せ絵でもある。存分に、ご堪能いただきたい。

齋藤路恵、蔵原大、仲知喜の三人は第1期に引き続いての登場となる。第1期でも、彼らはそれぞれ単独で、あるいはペアを組んで創作を試みてきた。

今回の「蠅の娘」のメイン・ライターは齋藤路恵。「SF Prologue Wave」はオリジナル短篇「犬と睦言」(<http://prologuwave.com/archives/2240>)を発表したばかりなので、その名を憶えておられる方も多いだろう。今作は齋藤路恵がプロットを著し、蔵原大がアクションや銃器の設定をチェック、仲知喜が世界観や小説造形についてのアドバイスを行ない、それを享けて齋藤路恵が推敲を重ねる……という手順を経て制作された。ただし小説としては、齋藤路恵の作家性が最大限に尊重されたものとなっているため、彼女の単独作とみなしても問題ないだろう。なお、本作は「擬^{ナノ}似^{ボット}群^{・スウォーム}体」や「V^{ヴァーチャル}・リアリテイ

参考：書き手が独自に想像を膨らませたものである。